

ラカンの記号空間

宇波 彰

はじめに

ジャック・ラカン(一九〇一―一九八二)の仕事は、単に精神医学の領域に留まらず、哲学・文学理論を含むきわめて広範な分野で影響力を拡大しつつある。しかし、そのことがわかってきたのは、最近になってのことである。一九六六年に彼の論文集『エクリ』が刊行されたとき、同時代人はこの著作がどういう意味を持つのか十分にはわかっていなかったはずである。ラカン自身が一九七三年一月九日のセミナーで、『エクリ』が簡単には読めないことはよく知られている」と述べている(XX,29、ラカンのセミナーは最初に原書の巻数をローマ数字で示し、そのあとにページ数を示す)。また徐々に刊行されている「セミナー」の解説もきわめて困難である。それに

はいくつかの理由があるが、ラカンが語ったことを文字化するときには誤りがあるだけでなく、テキストそのものの「重層構造」がきわめて複雑であるからである。「重ね書き用紙」と訳されることもある *palimpseste* は、すでに書かれてあったテキストを消してその上に別のテキストを書きこむ羊皮紙のことであるらしいが、ラカンのテキストはまさにこの「重ね書き用紙」にはかならない。そのため、ラカンのテキストを読むとき、その下にある別のテキストを解説する作業が求められる。こうした原因が重なっているため、その解説は難行にならざるをえない。ラカンの仕事の意義がなかなか理解されないのはそうした理由にもよる。

ラカンの仕事は実は非常に大きな意味を持つものであることがしだいに明らかになってきたのは、やはり彼の仕事を理解で

きる別の思想家たちの努力の結果である。早くからラカンの仕事の意義を認めていたのはルイ・アルチュセルであるが、のちにも述べるように、ジャック・デリダもしだいにラカンの「哲学」の重要性を確認するようになる。

また、ラカンによって、いままでは隠されていたフロイトの思想の意義が再発見され、フロイトの思想が新たな照明を与えられることになったことにも注目すべきである。ラカンのモットーであるとされる「フロイトへの回帰」のひとつの意味は、隠されていたフロイトの思想に照明を当てることである。フロイトが十九世紀末に友人の耳鼻咽喉科の医師フリースにあてた多くの手紙が残されているが、その中でフロイトが触れた「事後性」の概念が、ラカンによって見出されたのはその典型的な例である。そしてこの「事後性」の概念の意義を認識し、さらにそれをベンヤミンの思考とも結びつける試みが最近のフランス、アメリカのラカン研究者によってなされつつある。この小論はまさにフロイト、ラカンのいう「事後的」な操作を用いて、ラカンの思想の「転回」を追いかけつつ、彼による「ハムレット」の解説がどのような思考に基づいてなされたかを探求し、その論点にかかわるいくつかの問題を考察しようとするものである。それによっておのずからフロイトとラカンの差異も明らかになるはずである。

また、「部分対象」といわれるラカンの重要な概念も、もとをたどるとフロイトの部分衝動という考えにいたる。もちろん

「部分対象」はメラニー・クラインによって、理論化されたと言われているが、クラインの思考の根源には、やはりフロイトが存在する。部分対象に限らず、ラカンの概念はひとつだけを取り上げて考察することはできない。「ハムレット」に関するラカンの考察も、けっして「欲望」の概念だけを中心にしていない。

「ハムレット」は、すでにフロイトが考察の対象とした演劇であり、その解釈、つまりオイディプス・コンプレックスの概念による解釈は、二十世紀以降のこの作品の具体的な演出に非常に大きな影響を与えたといわれている。ラカンは、ほとんど固定したかのように見えるフロイトの「権威」にこだわらず、独自の「ハムレット」論を展開した。残念ながらラカンの「ハムレット」論、もしくはハムレット論は、われわれの周辺でも、また欧米でもまだ十分には検討されていないように見える。この小論はまだ説明不足のラカンの思考のこの側面を追いつつ、「新たなハムレット問題」ともいうべきものの論点を提示したい。その作業を通じて、ラカンの思想そのものを再検討することも可能になるであろう。

ここで断っておきたいのは、本章で使われる「記号空間」ということばが、ラカンの概念である「ル・サンボリック」に対応するものであるということである。もちろん、このル・サンボリックもきわめて難解な概念であるが、われわれはこのル・サンボリック、つまり記号空間に存在し、生きていくとい

う宿命を背負っている。とはいふものの、これを自明の前提としてはならない。たとえばチャールズ・シェファードソンは、そのラカン論の冒頭で次のような問題を提示する。「多くのラカンの読者は、本当にすべてが言説によって構築されたもの、つまりル・サンボリックの所産なのか、そしてもしもそうでないとするならば、素朴な実在論に戻ることなしに〈外部〉について語るができるだろうかと考えている。」(Chains, Shepherdson, *Lucan and the limit of language*, Fordham University Press, 2008, p.1) 以下には、ル・サンボリックについての最も重要な問題がある。シェファードソンは、われわれの存在をすべてル・サンボリックの支配下におくことが可能なのか、つまり、言語が支配している現実世界に完全に従属したままでいることが可能か、そしてもしもそれが可能でないとすれば、実在そのものの存在を言語なしで考える「素朴な実在論」に戻ってしまいはしないかという問を提出しているのである。これは現代思想のユダヤ系研究者であるスーザン・ハンデルマン（現在はイスラエルの大学で教えている）が「誰がモーセを殺したか」（山形和美訳、法政大学出版局、一九八七）の最初の部分で提起する問題に対応する。ハンデルマンは、ことばと物の関係について、ギリシア人が「ことばは真の存在を表現するものではない」と考えているのに対して、ヘブル語で *davar* が「ことばのみならず物をも意味する」ことを根拠に、ユダヤ思想ではことばと物が一致すると見る。「ギリシアの啓蒙思想が壊したのはまさ

に、このことばと物との、言語表現と思想との、言説と真理との間にもともとあった統一性であった」(p.19)。ところが、ユダヤ思想においては、「基本的な現実というものは言語的なもの」であり、「神のまねびとは、沈黙して受けとることではなく、語り、解釈することであった」(p.20)のである。要するにギリシア人は言語は現実のすべてを表現できないと考え、ユダヤ人は現実が言語によって示されたものにほかならないと考える。ハンデルマンが提示している問題はまさにラカンの問題である。

ラカンの言語

ラカンの書いたものを含む『エクリ』（佐々木孝次他訳、弘文堂）と、語ったことの記録である二十数冊の『セミネール』（岩波書店から邦訳刊行中、原書でも未刊のものが多い）を読むとき、その言語表現に不思議な魅力、ときには一種の魔力のようなものを感じることもある。特に「セミネール」は、ラカンの発言を女婿のジャック・アラン・ミレルたちが文字化したものであるという限界がありはするが（その文字化が不正確だという批判もあるらしい）、それにもかかわらず、いくら何でもラカンの考えていることに直接触れているような気になれる。またセミネールの雰囲気も幾分か感知できることがある。

アメリカのラカン研究者で、実際に「セラピー」といわれる

分析治療の仕事もしているブルース・フィンクは、二〇〇五年に『エクリ』の完全英訳版(序文によると、この英訳には夫人のエロイーズ・フィンク、ミレル、スラヴォイジエクなども協力した)を刊行したほか、これまで自分の臨床体験に基づいた考察を含む三冊のラカン論を公にしている(そのうちの二冊の邦訳が誠信書房から二〇〇八年に刊行された信友建志他訳『ラカン派精神分析入門』である)。その第三冊目にあたる著作のなかで、フィンクは次のように書いている。「ラカンの書いたものはわれわれに影響し、ときにはわれわれを打ちのめしやぶる。」(Bruce Fink, *Lacan to the letter*, University of Minnesota Press, 2004, p.155)。ここで使われている「打ちのめす」(upset)ということばはきわめて強力である。ただし、「打ちのめされる」ためには、フィンクがこのラカン論の序文で述べているように、ラカンのテクストを「一行ずつ読むという基礎」が必要である。この the basis of a line-by-line readingこそ、ラカンの解説に必須の作業である。これはラカン自身がフロイトのテクストを読むときに使った方法であって、ラカンは「セミネールV」で、フロイトの「快樂原則の彼岸」を「一行ずつ追いかける」(suivre ligne par ligne)という方法で読んだと述べている(V,241)。つまりフィンクはラカンがフロイトのテクストについて用いた方法をラカンに使用したと見ることができると述べている。しかしわれわれがこの方法をラカンについて使用しても、それはきわめて困難な作業である。ラカンのテクストを「一行ずつ解説」

することは至難の業だからである。しかもラカンのテクストには、多くの「材料」がある。「ハムレット」やギリシア悲劇のほかに多くの文学作品があり、突然モーパッサンの小説が言及されると思うと、次にはスペイン・バロックの画家スルバランの異様な聖女像が図示される。「一行ずつ読む」ことは、ただ単にラカンのテクストだけを読むことではない。そのテクストにすでに刷りこまれているものも読んだり、見なくてはならない。ラカンのテクストは、すでに述べたように、ユダヤ教のテクストとしても用いられていた「重ね書き用紙」として扱われることが求められる。

実際にラカンのセミネールに出席したひとたちの証言によるならば、ラカンの講義がどれほど異様で、魔術的であったかが推測できる。たとえばジャン・ミッシェル・ラバテは、数百人が出席していたというラカンの講義には、それをテープに録音しようとして「マイクの林立」(the forest of microphones)が出現したと書いている(Jean-Michel Rabaté, Lacan's turn to Freud, in Rabaté ed., *Cambridge companion to Lacan*, Cambridge University Press, 2003, p.1) われわれの周辺に「マイクの林立」を可能にするような講義・講演があるとは思えない。かつてフランスの右翼運動アクシオン・フランセーズの指導者であったシャルル・モラスの演説は、声が小さく、またけっして上手でもなかったが、きわめて魔術的であり、聴衆はそれに陶酔したというが、若いラカンも彼に心酔していたひとりであった。あるいはラカンに

はモーラスの遺伝子が組み込まれていたのかもしれない。のちに言及するアレクサンドル・コジェーヴの有名なヘーゲル講義も、やはり参加者を魅了するもので、彼の講義が終わると、聴いていた人たちは茫然として教室を立ち去ったという。コジェーヴと親しかったラカンは「セミナー」でも、たとえばプラトンに関して彼に言及している(、彼からヘーゲルについて学んだだけではなく、「行為遂行的」(performative)な話し方も学んだ可能性がある。

ラカンとデリダの思想を結びつけて考えようとした著作(René Major, *Lacan avec Derrida*, Flammarion, 2001)のなかでルネ・マジヨールは、「過去数十年の思想空間の変化は、ラカンなしでは、ラカンの挑発なしでは不可能であった」と書いている(p.16)。またマジヨールは、のちに述べるフィリップ・ジュリアンのコロックでの報告についてのコメントでも、「ラカンは現代思想の空間を変貌させた」と反復しているし(*Études freudiennes*, No.33, 1992, p.75)、デリダも「精神分析の抵抗」(守中高明他訳、青土社、二〇〇七)において次のように述べている。「この数十年の間に思考の空間を変容させ得たものの何一つとしてラカンを相手に行なわれる何らかの対決＝せんめい闡明(quadre explication avec Lacan)なしには可能ではなかっただろう。」(p.90)それ程の強い力を持つラカンのような思想家と相対するときに、「打ちのめされる」覚悟で向かわなければならぬ。ラカンが「ハムレット」を考察するときに使ったという「ハムレツ

トで何が起こっているか」の著者ドゥヴァーウィルソンは「ハムレット」の「テキストを確定し、そのすべてのことばとフレーズと格闘すること」が「ハムレット」について書くための前提であったと述べている(Dover Wilson, *What happens in Hamlet*, Cambridge University Press, 1935, p.13)。「すべてのフレーズ、ことばと格闘する」(wrestle with every phrase and word)というのはいきわめて印象的な部分である。スチュアート・ホールもマルクス解釈に関するアルチュセールのテキストと格闘したというが、「ハムレット」に対するこのウィルソンの「格闘的」ともいえる態度は、フロイトに対するラカンの態度と同一である。ラカンに対しても、われわれはその方法を踏襲すべきであるが、それはどこまで可能であろうか。

ラカンの思想の「転回」

ラカンの思想の展開をたどってみると、一九五〇年代末から変化が見られるのであり、それを「転回」とする研究者が存在する。J・M・ラバテは、一九六〇年代のラカんに、「論理的もしくは言語学的な理解の様式」への移行(shift)があるとすると(Jean-Michel Rabaté, *Lacan's turn to Freud*, in *Cambridge companion to Lacan*, Cambridge University Press, 2004, p.11)「一般にはその「転回」は、鏡像段階理論から記号空間理論へ、リマジネールからル・サンボリックへとラカンの関心が転回したことである」とさ

れている。ラカンの三領域論について、私はいままでも述べる機会があったが、反復を厭わず簡単に述べておきたい。リマジネール (Imaginaire) には「想像界」という訳語が与えられているが、それはむしろ「像」(イマージュ・Image) の領域のことである。ラカンの有名な鏡像段階理論は、リマジネール論の中心である。ル・サンボリックは、言語を中心とする記号、したがって法・掟・慣習・伝統などが支配している領域であり、むしろ現実世界である。ラカンの思想については欧米ではすでに何冊かの「ラカン事典」が刊行されているが、そのうちの一冊で「ル・サンボリック」の項を見ると、次のように説明されている。「ル・サンボリックは、法・契約、社会的・親族的構造と深く関係している。その法は各個人の歴史にまたがり、ル・サンボリックの基礎になっている。」(A compendium of Lacanian terms, Free Association Books, 2001, p.199) そして、「この法は言語の秩序 (order) と同じである」というラカンのことばが引用されている。要するに、ル・サンボリックとは、法が支配する領域である。そして問題は、それがどのような法であり、誰がその法を決めるのかということである。

「ル・レエル (le Réel) は「現実界」と訳されてきたために、現実の世界と思われがちであるが、それとはまったく無関係であり、定義することができず、言語では表現できない、不可視・不可知の領域である。アレнка・ズパンチッチ (ジジエクと同じスロベニア人である) は、ル・レエルについて次のように書

いている。「ル・レエルはわれわれに不可能なものとして生じてくる(われわれは不可能なものとしてのル・レエルに遭遇する) (Alenka Zupančič, *Ethics of the real*, Verso, 2000, p.235)。ル・レエルは基本的には「物」を示すラテン語 res に由来すると考えられる。それも具体的な「事物」ではなく、「もののけ」とか「ものぐるい」というばあいの「もの」に近い。

このような三領域論を前提にすると、ラカンのいわゆる「転回」は、リマジネールからルサンボリックへということになる。ロレンゾ・チーサも、そのラカン論『主体性と他者性』のなかで「疎外」という概念を使ってこの「転回」を考えている。「主体は像へと疎外されるが、それは言語への疎外と重なっている。」(Lorenzo Chiesa, *Subjectivity and otherness*, The MIT Press, 2007, p.36) 「像への疎外」とは、鏡像段階理論で述べられていることとであり、主体が自らを映す鏡の像に自分を同一化させることとであり、「言語への疎外」とは、すでに与えられているル・サンボリックに自らを委ねることである。特にこのル・サンボリックを「法の世界」として見るとき、欲望と法を結びつけるラカンの思想をさらに検討する必要に迫られる。

ル・サンボリックの変化

つまり、ル・サンボリックを支配する「言語」は、単純な意味での言語である以上に、命令し、支配する言語である。母親

の表情は、子どもに対する愛の表現であると考えるのが普通であるが、同時に彼女の欲望の表現であり、いわば幼児に命令する記号である（もちろん、その「欲望」が何を対象とするのかは別に考えなくてはならない）。そういう意味の言語であるから、オースティンの概念を使うならば、単に事実や事象を記述する「事実確認的」(constative)な言語ではなく、相手に行動させる「行為遂行的」(performative)な言語でなければならぬ。つまり、ル・サンボリックは、単なる「事実確認的」言語の領域であるのではなく、何らかの意味での「権力」がかわる領域である。このようなル・サンボリックは、アルチュセールの有名なイデオロギー的国家装置の概念とつながっている。アルチュセールの「呼びかけ」(interpellation)という概念は、言語の「行為遂行的」機能なしでは行使されないであろう。アルチュセールは、「呼びかけの声」の例として「おい、おまえ、そこのおまえ」という警官と思われる男の声を示している(アルチュセール、西川長夫他訳『再生産について』平凡社、p.267)。これは「呼びかけ」の背後に国家権力があることを示している。したがってinterpellationに与えられた「呼びかけ」という訳語はかならずしも適切ではなく、むしろ「命令的発言」という訳語の方が原意を伝えている。

一九五七年ごろからのラカンのセミネールでは、このル・サンボリックについてのラカンの考えに一種の「転回」が示されているように見える。従って、この小論は、ラカンのル・サン

ボリックを再考する作業でもあるということが出来る。ラカンは、その時期には「欲望」を中心に考えていた。一九五八年から五九年に掛けての「セミネールVI」のテーマは「欲望とその解釈」であった。そしてこの欲望論を「ハムレット」という文学作品、そこに登場するハムレットとガートルードという舞台上の人物を材料にして展開した。「ハムレット」とその登場人物たちは、すでにフロイトの考察の対象であったが、ラカンはフロイトとその弟子で、フロイトの伝記の著者として知られるアーネスト・ジョーンズ、わが国ではあまり知られていないエラ・シャルブなどのハムレット論を読み解きつつ、それらを超越して考えている。つまり、ラカンによるとハムレットの欲望は、けつして「母」を対象とするオイディプス的・無意識的・性的欲望ではなく、「母の欲望」、ガートルードの欲望である。「ハムレットの欲望は母の欲望である」というテーゼをどう理解するかが鍵である。そこには、「権力」という論点が絡んでいる。ハムレットはオイディプス三角形における息子であるが、それ以上に「デンマーク国王の息子」、「王子」であることに留意しておくべきである。

つまり、ラカンの「転回」を単にリマジネールからル・サンボリックへの転回として考えるだけでは不十分である。私ほもしもラカンに「転回」があるとするれば、それとは異なる次元のものであると考える。それはル・サンボリックそのものについての「転回」である。従来ル・サンボリックは「父の名」によ

って支配されているものであり、その父はサンボリックな父とみなされている。しかし、ラカンの一九五八―五九年度の「セミネールVI」では、既に一九五六年から五八年に掛けての「セミネールIV、V」で提示されていた「サンボリックな母」が改めて重視される。ラカンはまだこの段階では「サンボリックな母」について理論的な基礎付けをしてはいないが、それでも断片的に示される彼の見解を集めて判断すると、「サンボリックな父」に代わる「サンボリックな母」の姿が見えてくる。それを示唆するのがラカンのハムレット論とそれに先行する「セミネールIV、V」にほかならない。つまり、「セミネールIV、V」とラカンのハムレット論である「セミネールVI」は、「サンボリックな母」へとこの彼の思想の転回を示す重要なテキストである。

ラカンのハムレット論

ラカンの書いたもの、語ったことを検討するときに見えてくるのは、フロイトの力である。しかし、いわゆる「フロイトへの回帰」というラカンのモットーには、重層的な意味があることも確かであり、ラカンはけっしてフロイトの思想の「祖述」をしていたわけではない。それにもかかわらず、ラカンに対するフロイトの力はきわめて強く、ラカンの思想はフロイトの思想に対抗しようとする意志によって支えられている。

ラカンが「ハムレット」についてのセミネールを行なった

のは、一九五八年から五九年に掛けてである。その前年には「無意識の形成物」というタイトルの「セミネールV」が行われているが、このふたつのセミネールはきわめて密接な関係にある。ただし「欲望とその解釈」というタイトルのセミネールは、「セミネールVI」として刊行が予告されているが、二〇〇八年十二月現在では未刊である。しかしこのセミネールのI、IIはOrnicar? (Champ Freudienneの機関誌)の二十四号(一九八二)に、III、IVは二十五号(一九八二)に、V、VI、VIIは二十五/二十六号(一九八三)に掲載されているので、本稿ではそのテキストを使うことにする。「セミネールVI」については、(VI,4c)のように表記し、それがこのセミネールの第4回で2と表示された部分のものであることを示す。「セミネールV」(J. Lacan Seminaire, Les formations de l'inconscient, Seuil, 1998)を引用するときは、(V,231)のように表記し、巻数とページ数を示す。なお、「セミネールVI」のV、VI、VIIの部分には英訳がある (Shoshana Felman ed., Literature and psychoanalysis, The Johns Hopkins University Press, 一九八二、ただしこの英訳には不正確な部分があり、また欠落しているところがある)。

ラカンのハムレット論については、すでにいくつかのいわゆる「先行研究」がある。しかし、わが国のラカン研究者、ラカンに関心を持つ人たちも、まだこのハムレット論について十分な考察をしていないように思える。すでに言及したアレнка・ズパンチッチにもハムレットに触れた「ラカンにおける倫理と

悲劇」がある。ズパンチッチは、「行動と欲望の関係」が、倫理を規定するというラカンの立場を説明し、この問題が演劇と関連すると説く。演劇が行動(action)の場であるというアリストテレス的な考えである。ズパンチッチは、この論文のなかで「ハムレット」「アンチゴネ」の問題が「欲望の袋小路、この袋小路に対処する方法」の具体的な提示であると述べている(Alenka Zupančič, *Ethics and tragedy in Lacan*, in *The Cambridge companion to Lacan*, Cambridge University Press, 2003, p.174)。ズパンチッチが「欲望の袋小路」というのは、彼女にとって「不可能なもの、ル・レエルを目指すものが欲望である」からである。パメラ・タイテルの『ラカンと文学批評』(市村卓彦他訳、せりか書房、一九八七)では論じられていないが、それはおそらく「ハムレット論」のテクストがまだ刊行されていなかったからであろう。すでに言及したブルース・フィンクにも「ラカンとともにハムレットを読む」という論文がある(Bruce Fink, *Reading Hamlet with Lacan*, in *Willy Apollon*, Richard Feldstein ed., *Lacan, politics, aesthetics*, State University of New York, 1996, 以下)の論文はRHと略記する)。フィンクはこの論文の冒頭で、ラカンのハムレット論が「欲望がどのように構成され、シンボリックな去勢において何が巻き込まれているのかをテーマにしている」と指摘する。さらに、「ラカンによるシェイクスピアのこのテクスト(「ハムレット」)の探求の方法は、見たところ異様である」とし(RH, 181)、ラカンのハムレット解釈がきわめて

異色のものであることに注目している。「異様」(strange)とフィンクがいうのは、それがオイディプス・コンプレックスに基づかない解釈だということである。ここにラカンの思想の「転回」を見るべきであり、重要な論点である。そしてフィンクは、ラカンのハムレット論が、「欲望がどのように形成されるか、サンボリックな去勢は何か」という問題の探索であると規定する(RH, 183)。フィンクのこの問題設定は非常に有効である。欲望と去勢というふたつのテーマがきわめて重要であることがフィンクによっても確認されているからである。またJ・M・ラバテもラカンのハムレット論が、フロイトのハムレット論とはまったく異なるものであり、ラカンにとっては、この劇の謎を解く鍵が「母ガートルードの測ることのできない欲望、もしくは彼女の享楽の隠された源泉」にあると説く(22)。つまりこの劇を解説する鍵は「欲望」と「享楽」だとするのである。しかし、それでは「母ガートルードの欲望と享楽」とはどういうものなのか。ラバテ自身が「しかしながら欲望はあらゆる緊張と矛盾を含むひとつの神話的概念である」と述べていて、解説はなされていない。

すでに述べたように、ラカンのハムレットについてのセミネールでは、「ハムレットの欲望は母(ガートルード)の欲望である」というテーゼが反復されている。つまり、「ハムレット論」であるにもかかわらず、ラカンのセミネールは、ハムレットの母ガートルードに考察の焦点をあてようとする。T・V・ペルト

も、ラカンとジョーンズのハムレット論の差異は、「この劇における母の役割についての見方の差異」であると指摘している (Tannis Van Relt, *The other side of desire*, SUNY, 2000, p.94 以下で引用するときはODと略記する)。「ハムレットの欲望は母ガートルードの欲望である」というテーゼ、またそれを一般化したかたちで「主体の欲望は大文字の他者の欲望である」というテーゼが、この「セミネールⅥ」では反復して示されている。このふたつのテーゼを結びつけ、それによってラカンの欲望論を探ることが必要である。このふたつのテーゼを単純に結合して「ハムレット」と「主体」というふたつの主語を消去すれば、「母の欲望は大文字の他者の欲望である」ということになる。元来、「大文字の他者」とは、不可視・不可解な領域としてのル・レエルに支えられているものとしての「父」のことであった。それがいまや「母」の側へと中心が移動してきたのである。これこそがラカンの思想の重要な「転回」であると私は考える。ラバテは「ラカンのいう大文字の他者はほとんど母によって具体化されている」(p.22)という解釈を示している。これはル・サンボリックそのものについての見方の変化になるであろう。

「オイディプスのハムレット」からの離脱

しかしこの段階では、母の欲望の対象が何であるのかは明確ではない。「欲望」はラカンの考察の中心にあるもののひとつ

である。またラカンが「セミネールⅩ」で「欲望の対象の確定は難しい」(X, 67)といつつ、同時に「解釈において現れる欲望」(X, 68)の重要性を指摘していることに注目しなければならぬ。欲望の対象はなかなか把握できないが、それにもかかわらず「欲望の解釈」が求められる。「セミネールⅥ」のタイトルが「欲望とその解釈」であることを改めて想起すべきである。「欲望の解釈」とは、欲望の言説化である。対象を言説化していくことが哲学の仕事であるとする、コジェーヴが解説した限りでのヘーゲルの思想が継承されている。「主体の欲望は大文字の他者の欲望である」というテーゼそのものもきわめてヘーゲル的である。

「主体の欲望が大文字の他者の欲望である」するならば、主体の欲望の対象は、大文字の他者の欲望の対象である。しかしフランクは、大文字の他者の欲望の対象は「神秘的」であり、「ひとつの未知のもの」(an unknown)であるとするとする (RH, 192)。「大文字の他者」そのものが不明確である。しかしここにフロイト、ジョーンズのハムレット論との差異が見えてくる。というのは、フロイトでは「主体の欲望は他者の欲望である」、あるいは「ハムレットの欲望は母ガートルードの欲望である」という考えは出て来なかったからである。フロイトは『夢判断』(一九〇〇)のなかでハムレットについて論じている。それは基本的には、オイディプス・コンプレクスを持つハムレットという立場である。ハムレットには、父である王を殺して、母と結婚したい

という無意識の欲望があったというフロイト的な解釈は、その後の「ハムレット」の演出にさえ大きな影響を与えたらしい。「ハムレット」第三幕第二場で、ローゼンクランツがハムレットに母ガートルードの依頼を伝える場面がある。野島秀勝訳『ハムレット』（岩波文庫、二〇〇二）では、この場面についての次のようなスペンサーの見解が訳注として付けられている。「お部屋(office)はガートルードの私室であつて、寝室ではない。現代の演出家はおうおうにして、ハムレットのオイディプス・コンプレックスを強調するための寝室に変えている。」(p.179) 同じくとはせずに言及したベルトも述べている。ベルトはローレンス・オリヴィエによる「ハムレット」の演出が「オイディプスのヴァージョン」であり、原作のガートルードの私室(closet)をやはり寝室に変えていると指摘する(SD, p.108)。フロイト以来、「ハムレット」はオイディプス・コンプレックスの具体的な表現として見られることが多かったということであり、それが「常識化」して流通していたのである。

ラカンのハムレット解釈は、これとはまったく異なる。もちろんラカンにはオイディプス・コンプレックスという概念そのものを否定するのではない。ラカンの「欲望」についての考えは、フロイトのこの概念と直接につながっている。すでに述べたように、ラカンの基本的な立場は「フロイトへの回帰」であるが、しかしそれはけっしてフロイトを絶対視することではなかった。ラカンは「ハムレットの悲劇は欲望の悲劇である」と、「セ

ミネールVI」のIIの冒頭で述べている。この「欲望」は、ハムレット自身の欲望ではなく、すなわち母ガートルードの欲望であるが、元来「主体の欲望は他者の欲望である」というのはどういうことなのか。その欲望の対象は何か。すでにラカンはハムレットのオイディプスの欲望、つまり母への無意識的・潜在的な欲望を否定し、「セミネールVI」において「ハムレットの欲望は、母に対する欲望ではなく、母の欲望である」と明言している(M.S.C)。そして、このハムレット論で展開されている欲望論は、「セミネールV」において示されていた、「子どもが欲望するのは、母ではなく、母の欲望である」というテーゼの具体化である。その前提としてあるのは、「私は他者である」というラカンの最も基本的なテーゼである。

「母の欲望」が重視されるということは、「父」の存在が軽視されるということである。そしてそのことは、ラカンのいわゆる三領域論と深く関連する。一九九一年に「フロイトを読むラカン」というテーマで開かれたコロックでのフィリップ・ジュリアンの報告「ラカンの三領域論の起源」はその点できわめて興味ある論点を提示している(Philippe Julian, L'origine de la triade lacanienne, in Lacan, lectrur de Freud, Érudes freudiennes, No33, 1992)。ジュリアンはラカンの三領域論で示されるリマジネール、ル・サンボリック、ル・レエルという概念の起源が、フロイトの「トータル・イメージ」(l'image parentelle)にあるとする。ジュリアンによると、一九五一年あ

たりのラカンは、このフロイトの理論から、まず「イマジネー
ルな父」という考えを導き出す。それは「父のイマゴ」であるが、
このイマゴが「サンボリックな父」、つまり家族を保護し、支
配し、管理する「権力」を持つものとしての「父」へと転換し
ていく。ラカンのいう「父の名」は、この意味においてのサン
ボリックな、つまり法的・規範的なものとしての「父の名」で
ある。

ところが、このような父の権威はしだいに低下する。ジュ
リアンは「父のイマゴの社会的凋落」(le declin social de l'Imago
paternelle)というラカンのことばを反復して引用する(p.63)。「家
族的なつながりである以前の、本質的には政治的・宗教的なつ
ながりの基礎を作るものである限りでのサンボリックな父」が
いまや凋落(declin)してしまったのである。ラカンは「社会的」
ということばをめつたに使っていないので、この見解はきわめ
て注目すべきものである。いわばこれは「オイディプスの凋落」
を示すものであるといえよう。しかしジュリアンはそれに代わ
るガートルードの登場について論じてはいない。つまりジュリ
アンは「サンボリックな父」の退場については語つたが、「サ
ンボリックな母」の登場を見届けてはいない。その欠落を補う
というわけではないが、ドイツのラカン研究者で精神科医でも
あるというレグラ・シンドラーは論文集『ドイツ語圏における
ラカン』(ラカンがドイツ語圏、つまりドイツ、スイス、そし
て特にフロイトが活躍したオーストリアでどのように評価され

ているかは、きわめて興味あるテーマである)に収められた論
文「サンボリックな母とレエルな父」において、「サンボリッ
クな母」を前面に出して論じている。彼女は、「サンボリッ
クな父とイマジネーな母」という、いわば固定化された対立概
念からラカンが早くから離脱していたとして次のように説いて
いる。「サンボリックな母とレエルな父が、一九五〇年代後半
のラカンのセミナーとテキストに現れたのを誰も否定できな
い。」(Regula Schindler, Symbolic Mother-Real Father, in E. Stewart,
M. Jaanus, R. Feldstein eds, Lacan in the German-speaking world,
SUNY, 2004) 中には、いわば「オイディプスからガートル
ードへ」という動きを認めることができる。ただしシンドラーの
この論文でも、「レエルな父」の実体は不明確である。それは「ル
レエル」そのものの不可知性と関係する。

ラカンのいう「欲望」は、主体の欲望ではなく、「大文字の他者」
の欲望であり、「ハムレット」のばあいは、「ハムレット」の欲望
は母ガートルードの欲望である」というテーゼとして具体化さ
れる。「大文字の他者の欲望」という概念は、一九六〇年にラ
ワイヨームンで行われたコロックでのラカンの報告にも見えて
いる。それは「主体の転覆と欲望の弁証法」という報告であ
る。そこでも「人間の欲望は大文字の他者の欲望である」とい
うテーゼが反復されているが、それと同時に「無意識は大文字
の他者のディスクールである」という規定もしている(『Lacan
Enfants, Seoul, 1966, p.814』)。この「主体の欲望は大文字の他者の

欲望である」というテーゼの意味についてフィンクは英訳での訳注で、「大文字の他者の欲望」は「大文字の他者への欲望」とも解釈できるとしている (Lacan, *Écrits*, tr. by Bruce Fink, 838)。

ル・サンボリックの変化

しかし、いずれにしても「大文字の他者の(への)欲望」、「母の欲望」がどういうものかはまだ明確でない。この問題の解明に示唆を与えるのは、やはり「無意識の形成物」をテーマとする「セミネールV」である。そのなかでラカンは欲望について、次のような注目すべき重要な見解を示している。「欲望の世界に入ることは、人間存在にとって、彼方にある何かから与えられた法に従うということである」(V243)。「彼方」(au-déjà)が何かは不明瞭ではあるが、それをル・レエルではないかと推察することも不可能ではない。そしてラカンは、その法が「処罰棒による法」(la loi de la schlague)であるとす。schlagueはおそらくドイツ語のSchlagから来たことばであり、白水社の『大仏和辞典』によると「ドイツの兵学校・刑務所で処罰のために使われた棒」である。日本の旧海軍で使われた「精神棒」のようなものである。つまり、欲望の世界を支配している法は暴力によって維持されている。そしてその暴力の根源は「彼方に存在する何か」(quelque chose qui existe au delà)である。

ラカンは欲望と法とを結びつけるこの立場をすでに一九六二

年度の「セミネールX」においても明確に示していた。このセミネールは「不安」(angoisse)をテーマにしているが、そこでもラカンはフロイトに依拠しつつ「欲望と法は同じものである」(X 98)と主張する。法が支配している世界とはル・サンボリックである。そして「彼方」は、すでに推測しておいたように、おそらくル・レエルである。このように考えることによつて、「ハムレットの欲望は母ガートルードの欲望である」というテーゼの意味に迫ることができる。少なくとも「欲望」が単なる性的な欲望のレヴェルを超えたものであることがわかってくる。そしてこの段階でラカンは「サンボリックな母」という概念を提示していることにも注意すべきである。すでにフィリップ・ジュリアンはラカンの三領域論の起源が、父・母それぞれの三分法に由来するという説を示していた。通常は、「イマジネールな母、サンボリックな父」というように対比させるが、ラカンはすでに「セミネールV」において「サンボリックな母」という概念を示している(V172)。ラカンは「子どもが母の欲望に依存している限りでの母と子の関係」(V81)が存在するとし、そこに「母の最初のサンボル化」(la première symbolisation de la mère)があると考える(V181)。この「サンボリックな母」の概念を具体的に展開させたのが、「セミネールVI」つまり「ハムレット」についての考察である。

この段階ですでに「母」は、子どもにとって生物学的な意味での「生みの親」ではなくなっている。ここに見えているのは、

まさしく「サンボリックな母」、つまり命令し、管理する母である。なぜなら「母の背後には、ル・サンボリックのすべてがあり、母はそれに依存している」(VI.182)からである。ここで語られていることは、ラカンの欲望論の中心にあるものである。ラカンは、さらに「大文字の他者の欲望、それは母の欲望である」(VI.183)と規定する。いままで「大文字の他者」は、「父の名」によって支配されているものと考えられてきた。それがここでは否定される。ラカンの「大文字の他者」として、それは別の大文字の他者はない」というテーゼはよく知られているが、「セミネールVI」でもそれが反復される(VI.52)。「大文字の他者」は絶対的である。そしてラカンは「この劇(「ハムレット」)は、母という大文字の他者によって支配されている」と明確に述べている(VI.51)。このようにして「ハムレット」の主役は、ハムレットではなく、ガートルードであることが明らかにになる。このことはフロイトとジヨーンズの「ハムレット」解釈の否定である。ラカンが「ハムレット」を演出するとすれば、ガートルードの「私室」は、王の執務室に変えられなければならないであろう。

去勢するワニ母

ラカンがオイディプスの凋落からどのように「母」の役割を重視しようとするようになったのか。最初の段階では、ラカン

は母を父の代理と見なす立場を残している。たとえば「セミネールV」では、「父が許容し、権威付けする限りにおいて、父のメッセージは母のメッセージになる」(VI.215)としている。また母の役割は副次的なものと思われているように思われる。しかし、しだいに母の役割が重要性を増してくるのであり、同じ「セミネールV」でも、「父的な超自我」と「母的な超自我」が並立されている(VI.16)。ラカンがフロイトの概念である「超自我」をどう理解していたかは別に考えなければならぬが、一応はそれがル・サンボリックとつながるものであると考えることができるであろう。超自我の領域は、一種の法の世界だからである。

このようにして「母」が主役になるのが「ハムレット」という「欲望の悲劇」である。このようにしていまや「ハムレット」の主役になったガートルードは、「ワニ母」(Krokodillenuter)である。この「ワニ母」ということは、すでに触れたシンディーラーの論文に見えるものであるが、出典はいまのところ不明である。「悪意があり、何でも食べてしまうこのワニ母は、子どもたちとその父を食べる時を狙っている」(p.105)のである。それは「去勢する母」であり、フロイトが「不気味なもの」で論じたホフマンの「砂男」に登場する「半月に住む男」と重なる。いままで「サンボリックな父」が引き受けていた「去勢」の仕事を、「ハムレット」では母が代わって実行する。ラカンはこの「ハムレット論」の最初のところで「ハムレットにおい

ては必然的な去勢がある」と予告していた(110)。ラカンはもつと恐ろしい母を登場させる。それは *le vagin denté* (toothed vagina) を持つ母である (V.211)。この「去勢する母」がル・サンボリックを支配している。この *le vagin denté* はレヴィストロースの『生のものと料理したもの』にも出づくる (Levi-Strauss, *Le cru et le cuit*, Plon, p.121)。

「去勢する母」が、去勢の対象とするのは、いうまでもなくファロス (phallus) である。しかし、「ハムレット」のばあい、それは誰のファロスなのか。ここまでの解釈を連続させれば、それはまずハムレットの父のファロスであり、彼が殺されたあとはクローディアスのファロスであるはずである。ラカンは「セミネールVI」でオフィーリアということばがファロスと関連するものであることを強調する。そしてファロスは究極的には「我らの父」、つまり神である。しかしラカンにおけるファロスの意味については、まだ解明されない部分の方が多い。この問題については別の機会に改めて論じたいが、最後にサンボリックな親、つまり政治的なものがからむ父・母の問題に関して、付言しておきたいのは、ラカンがハムレットについて考察していたまさにそのころ、つまり一九五六年にカール・シュミットのハムレット論『ハムレットもしくはヘカベ』(細見基訳、みすず書房、一九九八)が刊行されていたことである。ラカンがこのシュミットのハムレット論を読んだとは思えないが、シュミ

ットのハムレット論は、「ハムレット」を当時のイギリスの政治状況から深い影響を受けたものとして解説するものであり、ラカンの「ハムレット」論と共通の認識がある。些細なこともかもしれないが、このふたりはいずれもドーヴァー・ウィルソンの『ハムレットで何が起ったか?』(Dover Wilson, *What happens in Hamlet*, Cambridge University Press, 1935) を参考文献として使っている。同じ文献を用いながら、シュミットは政治的なものへと向かい、ラカンはいわばその政治的なものを支えるル・サンボリックが母の支配下にあることを論じようとしていた。それはどのような現実の政治的・社会的状況に対応するものなのか。

ピエール・ブルデューは、「社会的空間とシンボルの空間」の対応という考え方を『実践的理性』において示している。これは下部構造と上部構造という考え方の変形であるが、ブルデューはそれを「マルセル・モースから継承した「身体技法」の概念と組み合わせる『結婚戦略』(丸山茂他訳、藤原書店、二〇〇七)において展開した。社会的・現実的なものがシンボルのなもの、たとえば農民の歩き方といった「身体技法」に示されるといふ考え方である。ラカンのル・サンボリックも、あるいはブルデューのこの概念を使うとさらに明確になるかもしれない。しかし、ラカンに関する多くの問題がまだ未解決の状態にある。